

2019年度 学校教育活動の分析

2020年1月14日(火)西会津高校

アンケート回収率:生徒100%(前年度比±0)、保護者100%(前年度比±0)、教員100%(前年度比±0)

1 学校評価に関わるアンケートの結果をどう見るか

(1)本校に対する全体的な満足度

「14学校に満足している」という項目は、生徒で微増、保護者・教員で微減、という結果だった。肯定的な回答が7～8割であることからすると、概ね満足していると思われるが、今後も本校教育環境は激変が予想され、その推移をよく見定めたくえでの対応が必要になるものと思われる。

生徒・保護者にとって教育サービスを提供される場としての学校の満足度と、教職員にとっての職場としての満足度の双方を向上させていくためには、地域協働推進校ならびにコミュニティ・スクールとしての強みを活かし、地域資源を活用した学校経営を展開してバラエティ豊かな教育活動と校外資源(人材・環境)活用を実現していくことが求められていると言えよう。

(2)学習指導についての評価

「1教師は生徒の実態に応じた授業をしているか」「2学校の授業の難易度をどう捉えているか」の項目では、概ね高評価を得ており、「西高PC」による授業改善の意識が浸透しつつある。今後も生徒ファーストの授業づくりを目指し、批判や意見に真摯に対応する態度が求められる。

(3)生徒指導についての評価

「5生徒はあいさつ・服装・頭髪がしっかりしている」「6生徒は登校時間、授業時間や提出物の期限などを守っている」に対する生徒・保護者のA・B評価は90%前後となっており、全体として生徒は落ち着いた学校生活を送っていると評価できる。

(4)委員会活動、部活動についての評価

「7生徒は委員会活動や部活動に積極的に取り組んでいる」の項目では、前年度比でAB評価が上がり、CD評価が下がっている。2年前の部活動や委員会を再編の結果、その数を大幅に減らしたものの、生徒はそれぞれの部や委員会などで自分の居場所を見つけ、納得のいく活動が続けられている生徒が多いものと読み取れる。

ただし、今後のさらなるスタッフの減少と少子化を進展を見据えると、学校における部活動については、他高校との連携や、部活動を学校から分離し、社会教育におけるクラブスポーツとの連携など、タブーなき再検討が必要ではないだろうか。

(5)相談体制についての評価

「8学校には悩みを相談できるスタッフがいる」では、当事者である生徒の評価が他の二者(保護者・教員)と比して相対的に低いことに加え、前年度比でもAB評価が低下している。今後、教員数がさらに減少することを考えると、積極的に人を外に求め、教員だけではない人材の活用によって生徒へのケアを充実させることを検討する必要があると思われる。

(6)進路指導についての評価

進路指導に関する項目9・10では、生徒・保護者のA・B評価の上昇が見られ、よりオープンでわかりやすい、進路指導の実践が評価されたものと考えられる。

(7)地域連携についての評価

概ね肯定的な回答が多かったが、生徒のAB評価が他二者(保護者・教員)と比して低い。地域協働推進校として、教育活動全体で地域連携を図る余地がある。

(8) 広報活動についての評価

項目13では生徒のAB評価が対前年比で高まった。保護者は対前年比でそれほど動きはないが、高止まりになっていると考えられる。保護者への直接メール配信などが評価されたものと思われる。

教員のA評価の落ち込みが激しいが、本年度から「西高だより」を廃止したことによる自戒の評価によるものか。

2 授業評価アンケート結果から

本年度も、各教員の授業を生徒が評価する「授業アンケート」をおこなった。各教員が受け持つ科目の中から1科目以上を選び、年2回(インターバルを6ヶ月以上おいて)実施するルールで授業受講生徒からアンケート調査を採った。

生徒からは「1そう思う」「2だいたいそう思う」に8割から9割の支持を得、概ね生徒は授業に及第点をつけている結果となっているが、後述する西高PC評価活動の生徒の自己評価結果に表れているように、主体的な学びを実現するためには、さらに授業改良をおこなう必要があるものと思われる。

3 西高PC評価活動の生徒自己評価を読み解く

学校評価アンケートの学習指導の箇所でも言及した「西高PC」については、2019年に3回、生徒への自己評価アンケートを採った。

10の項目について、0・1・2・4・5の5段階で自己評価してもらった。7月・9月・11月の3回の各項目の得点平均値の推移を見ると、10項目を次の3グループに分けられる。

・上昇傾向の項目・・・「自己肯定力」「課題解決力」「協働力」「発信力」

生徒自身が自分の力の伸びを感じやすい項目ではあるが、日頃からの授業手法やLHRなどの特別活動、さらには学校行事などの本校教育活動全般において、生徒一人ひとりが主人公となり得る教授法や授業展開、場面設定や状況構築などに努めた教員の努力が成果として現れてきたと思われる。

・横ばい傾向の項目・・・「継続力」「傾聴力」「思考力」「西高PCへの意識」

抽象的な項目であり、生徒に自分の力の伸びを実感させるためには、授業の展開方法などで、生徒のやる気や思考をさらに刺激するための今後の工夫が待たれる項目でもある。

・下降傾向の項目・・・「生活習慣」「学習習慣」

この二つの項目は7月段階で比較的平均値が2.2～2.4と高かった。それが下降傾向にあるのは、いっしょに実施した教員からの評価結果で割と厳しめの評価を下された生徒が多く、9月・11月の調査では自分にきびしく評価した生徒が増加したからと思われる。今後は生徒の目的意識の明確化とそのための手段の具体化・明示化により、これら習慣の向上的変容を促す必要がある。

4 学校全体としての成果と課題

(成果)

(1)「西高PC」による教育活動展開の開始。

(2)「西高コーディネーター」の配置の実現。

(課題)

(1)授業や学校行事などの教育活動全体として地域と連携し、地域協働推進校としてコミュニティ・スクールの始動がスムーズにおこなえるようにする必要がある。

(2)「西高PC」による教育活動の展開を推し進め、生徒と保護者の満足につなげていく必要がある。